

令和八年度

滝川第二中学校 入学考查 問題

B  
日程

国  
語

(五十分・百五十点)

注 意 事 項

- 1 問題は1ページから18ページまであります。
- 2 解答は、すべて解答用紙の枠内わくないに記入しなさい。
- 3 「開始」の合図があるまで問題用紙を開いてはいけません。
- 4 受験番号と氏名を、解答用紙と問題冊子の表紙に正しく記入しなさい。
- 5 「終了」の合図で筆記用具を置き、監督かんとくの先生の指示に従いなさい。

受験番号						氏 名
			—			

一 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。(指定された字数には、句読点その他の符号ふごうもそれぞれ一字としてふくみます。また、書きぬく部分にふりがながある場合、これを省略してもかまいません。)

日本では、冬が太陽にもっとも近づくというときと驚おどろかれることがある。実は、地球は太陽の周りを楕円形だえんけいを描くように回っており、毎年一月初め頃ころにもっとも近づいて、七月上旬じゅうじゅんにもっとも遠ざかる。それぞれ「近日点」「遠日点」と呼び、①両日の地球と太陽の距離きょりの差は約五〇〇万キロ、太陽エネルギーの差は七％になる。にもかかわらず日本の一月が寒いのは、地球が地軸ちじくを中心に傾かたむいていて、太陽光の入射角度が違ちがってくるためである。東京の冬の太陽光度は、夏のそれと比べると約五〇度も低い。

地球はそうやって、太陽との位置や向きを変えて寒暖の場所を変化させたりはするけれども、結局、極地方は寒く、赤道は暑い。その温度差は一〇〇℃以上に達する。この温度差の不均衡ふきんこうから、さまざまな気象現象が生まれるのであるが、例えば台風もその一つで、不均衡を解消しようと、赤道の温かい空気をせっせとせつせと寒い地域へと運ぶ。

ところが近年、地球全体の温度が上昇し、②これまでとは違う不均衡状態が発生している。気候変動に関する政府間パネル(IPCC)によると、世界の年平均気温は産業革命前と比べて一℃上昇しているという。そのうえ世界が一樣に暖かくなっていくわけではなく、低緯度いどから中緯度、さらに高緯度になるにつれ、気温上昇が著いちじるしい。こうして南北の気温差が小さくなった結果、かつて見られなかった規模の気象現象が発生するようになった。

(中略)

九月は秋の入り口である。秋分の日を境に、日に日に夜が昼よりも長くなっていく。秋の特徴とくちょうをユーモアたっぷりに表現した言葉は多々あるが、その代表格が「女心と秋の空」と「男心と秋の空」のセットだろう。男女どちらがより移り気なのかは不明だが、「はづかしや／おれが心と／秋の空」と詠よんだ小林一茶先生は③男に軍配を上げた。

「秋の日と娘むすめの子はくれぬようでくれる」という諺ことわざは、秋の日が暮れないように見えて急に暮れるように、大事な娘も嫁よめにくれなさそうですんなりくれるという洒落しゃれである。そういえば父は私をかわいがって育てたが、三十路みそじを過ぎるとすぐに見合いの話を持ってきた。その対つひにあたるのが、「春の日と金持ちの親戚しんせきは

（A）で、ケチな金持ちを、なかなか暮れない春の日にかけている。続いて「秋茄子は嫁に食わすな」という諺があるが、これは人によって解釈がまったく異なるようだ。ある人は、秋茄子は体を冷やすので大事な嫁に食べさせるのはよくない、という意味だと心穏やかなことを言い、またある人は、秋茄子は美味しいから嫁にあげるのはもったいないと、曲がつたことを言う。

広い世界では、対を成す正反対の天候が同時に起きていることがある。ある国は雨が降りすぎて頭を抱え、よその国では晴れすぎて悲鳴を上げている。またある村は暑すぎて困り、別の町では寒すぎて参っている。ここでは天気に関する最新の出来事を「対」をテーマにまとめてみたいと思う。

## （B）

今夏ちようどジェット気流の凸の字に位置していた北米西部は、「二〇〇〇年に一度」という容赦ない熱波に襲われた。カナダの海岸では、口を開けた無数のムール貝の死骸が見つかった。浅瀬の水が高温となつて、茹で上がってしまったのだ。また六月末にはリットンという小さな村で、三日連続してカナダの最高気温記録が更新され、最終的に四九・六℃というありえない数

字が記録された。世の中にはトルネードハンターにハリケーンハンターなど、恐ろしい気象に魅せられる人たちがいるが、中には高温に（C）を上げる人たちもいて、そういうマニアは目ざらつかせながらリットンへの旅行計画を練っていたことだろう。ところがリットンは、記録が出た翌日に山火事が広がって、村の九割が焼失してしまった。あまりにも悲しい出来事である。

今年、世界の陸上は一八八〇年以来もつとも暑い六月を経験したようだ。中東のオマーンやUAEでも五二℃近い高温となつて、カナダ同様に国内記録が破られた。しかし陸とは対照的に、海のほうは今春まで続いたラニーニヤ現象の名残もあつて比較的低温で、陸海合わせた地球全体の六月の温度は観測史上五番目の高さにとどまった。

海の温度は今後また下がっていくかもしれない、そんな予想が出ている。今秋にラニーニヤ現象が再度起きる可能性があるからである。ラニーニヤ現象はペルー沖の海水温が例年より低くなる現象で、統計的には、前の年の冬にラニーニヤが起きていると、その翌冬は半分ほどの確率で同じ現象が続くか再発するという。そうなれば、日本は昨冬のように、「年越し寒波」に見舞われ、豪雪となるかもしれない。とはいえ、近年「ラニーニヤⅡ寒冬」

という構図は崩れてきたという研究もある。

## 減る秋、増える夏

地球の色は刻々と変化しているようだ。残念なことに、秋の紅葉は色あせていく運命だそうで、赤色が冴えなくなるかもしれないという研究もある。その原因は、気温上昇、そして秋そのものの長さが短くなることにある。

中国の科学者が、過去六〇年間の北半球の四季の日数をカウントしてみたところ、近年は夏が一七日増えた一方で、秋は五日短くなっていったという。このまま気温上昇が進めば、二一〇〇年には夏が一年の半分くらいを占めるかもしれないそうである。爽やかな秋が減って、暑苦しい夏が増えていくのは残念である。そんな寂しい気持ちを含めて、二つの諺をつくってみた。「<sup>④</sup>秋の日と夫の小遣い」。「夏の日と妻のへそくり」。変化する季節と、秋風の吹いた夫婦には似たところがある。

## (中略)

人間はなぜ温暖化を止められないのだろうか。なぜ、母なる地球を痛め続けてしまうのだろうか。こんな話がヒントになるかもしれない。

昔々あるところに、幸せな牛飼いたちと牛たちが、同じ囲いの中で仲良く暮らしていた。そこは主のいない、誰もが自由に使える平和な共有地だった。あるとき一人の牛飼いがひらめいた。「そうだ！ 牛をもう一頭飼えば、儲かるぞ」。さっそく手に入れた牛は牧草をむしゃむしゃ食べて大きくなり、牛飼いは喜んだ。それを見ていた別の人たちもあとに続けと追随して、次から次に牛が増えていった。するとどうだろう。まもなく牧草が食べつくされ、牛が全滅してしまったのである。

これは一九六八年に生物学者のギャレット・ハーディーが科学誌に発表し、有名になった「共有地の悲劇」と呼ばれる話である。まさか人々は牛を飼うことが、全体の大きな悲劇に繋がるなどとは考えていなかったのに、多数が同じことをしてしまったから、思いもよらぬ結果にいたってしまった。自分勝手に共有の資源を使うと、やがて枯渇するという人間の心理を風刺したものである。<sup>⑤</sup> この悲しい話に似た出来事が、いま、地球規模で起きている。

地球は共有地であり、「宇宙船地球号」と呼ばれることがある。資源は有限だから、同じ船に乗る運命共同体は、一致団結し

て資源を節約し、船内環境をキレイに保たなければならない。それなのに共同体の一員であるわれわれ人間は、化石燃料という資源を掘り返しては火にかけて、それぞれ好き勝手に浪費している。燃えるときに出了たガスは地球を温め、気候が変わり土地も荒れた。地球は広いからその影響を人間が感じ取るまでは長い月日がかかって、状況は悪化した。

そんな悲劇を食い止める策はあるだろうか。

キャロル・ローズという法学者は、「共有地の『喜劇』」というタイトルの論文を一九八六年に発表した。逆転の発想である。その論文によれば、共有の財産であっても、個人も全体も美味しい思いをすることがあるというのである。具体的にはどんな場合だろう。例えばインターネット上のレストランサイトのように、個々人にとっては店の感想を書くというだけの小さな行ないなのに、参加者が増えると、全体として信頼のおける役立つ情報源となっていくという例がある。同じように、ネット上の百科事典であるウィキペディアも、一人一人にとっては知識を書き込むだけの小さな労力で成り立つものだとしても、協力者が膨大に増えたことで、万人が使える世界的な情報リソースとなった。

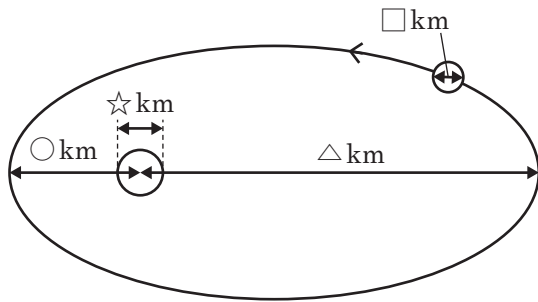
そんな例もあるのだから、人類はいま直面している温暖化とい

う問題に対しても、<sup>⑥</sup> 悲劇から喜劇に変えられる一手を持っているはずである。

(森さやか「いま、この惑星で起きていること」)

気象予報士の眼に映る世界」より。)

問一 —— 線部①「両日の地球と太陽の距離の差は約五〇〇万キロ」とありますが、この表現が表す式として最も適当なものを、次のア～エから選び、記号で答えなさい。



- ア ☆―□〓約五〇〇万キロ  
イ △―○〓約五〇〇万キロ  
ウ ○+△〓約五〇〇万キロ  
エ ☆+○〓約五〇〇万キロ

問二 ――線部②「これまでとは違う不均衡状態」とは、どのような状態ですか。これについて説明した次の文の「――」

に入ることを、【ア】は十二字で本文中から書きぬき、【イ】は最も適当なものをあとのア～オから選び、記号で答えなさい。

【ア】という不均衡ではなく、【イ】という不均衡が発生している状態。

- ア 南北の気温差がほとんどなくなっている
- イ 緯度によって気温上昇の度合いが異なる
- ウ 季節によって太陽との距離が変化する
- エ 太陽光の入射角度が季節によって違う
- オ 平均気温が全体で1℃以上上昇している

問三 ――線部③「男に軍配を上げた」とはどういうことですか。

最も適当なものを次のア～オから選び、記号で答えなさい。

ア 小林一茶は女よりも男の立場を尊重していたということ。

イ 筆者は女のほうが男よりも移り気であると考えたということ。

ウ 小林一茶は男よりも女のほうに肩入れかたしていたということ。

エ 筆者は男のほうが移り気であると主張したかったということ。

オ 小林一茶は男のほうが女よりも移り気であると考えたということ。

問四 (A)に入る表現を、十字以内で自分で考えて答えなさい。

問五 ( B ) には次のような小見出しが入ります。「**一**」に入ることを、「**ア**」「**ウ**」は一字、「**イ**」

「**エ**」は二字で、本文中から書きぬきなさい。

「**ア**」の「**イ**」、「**ウ**」の「**エ**」

問六 ( C ) に入る漢字として最も適当なものを次のア～オから選び、記号で答えなさい。

ア 腕うで

イ 声

ウ 音

エ 熱

オ 例

問七 — 線部④「秋の日と夫の小遣い」とありますが、筆者の作ったこの諺は、どのような意味であると考えられますか。三十文字以内で説明しなさい。

問八 — 線部⑤「この悲しい話に似た出来事が、いま、地球規模で起きている」とありますが、これはどういうことですか。これについて説明した次の文の「**一**」に入ることを、「**ア**」は二字、「**イ**」は五字、「**ウ**」は七字、「**エ**」は三字で、本文中から書きぬきなさい。

「**ア**」という共有地の「**イ**」という制約を無視して、「**ウ**」した結果、「**エ**」を引き起こし、人間の生存に大きな影響を与あたえているということ。

問九 — 線部⑥「悲劇から喜劇に変えられる一手」とありますが、どのようなことですか。これについて説明した次の文の「**一**」に入ることを、「**ア**」は二字、「**イ**」は五字で、本文中から書きぬきなさい。

「**ア**」を地球および人類全体の「**イ**」として積み重ねていくこと。



問十 ―線部「かつて見られなかった規模の気象現象」について、本文中で紹介しょうかいされている事例として最も適当なものを次のア～オから選び、記号で答えなさい。

次のア～オから選び、記号で答えなさい。

ア カナダのリットン村では、異常な寒波により記録的な低温が観測された。

イ 北米西部では長雨が続き、各地で大規模な洪水や土砂崩れが発生した。

ウ カナダの海岸で浅瀬の水温が高くなり、ムール貝の死骸が多数見つかった。

エ 世界中に観測史上もっとも寒い六月が訪おもむけ、多くの地域で農作物が被害を受けた。

オ 中東のオマーンやUAEでは、冷夏となって国内記録が更新された。



二 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。（指定された字数には、句読点その他の符号もそれぞれ一字としてふくみます。また、書きぬく部分にふりがながある場合、これを省略してもかまいません。）

ここはあずかりやさん。

明日町こんぺいとう商店街の奥（おく）にひっそりと存在するお店で、お金をもらってものをあずかるという、変わった商売をしている。うわさによると、こういうお店はよそにはないらしい。

さて、それまで店主とお客さまの間でどんなやりとりがあったのか、居間の押し入れで寝（ね）ていたわたしにはわからない。「猫（ねこ）です」で会話は途絶（とだ）え、シーンとしている。

押し入れの中で大あくびをして、のびをした。のんきでやっているんじゃないのよ。心を落ち着かせるための方法なの。

あずかりやは店主がひとりできりもりしている。店主は男で、三十年くらい生きているらしい。記憶力バツグンで、頭がいいんだけど、世間知らずなところがあって、永遠の青年って感じ。石鹸（せっけん）で洗（せん）い立てのような、綺麗（きれい）な顔をしている。

彼女（かのじょ）はいない。恋愛経験（れんあいけん）も（わたしの見たところ）ないようだ。

① わたし？

わたしは店主に「社長」と呼ばれているけど、経営にはタッチしていない。一緒に暮（いっしょ）らしているけど、夫婦（ふうふ）ではない。

それにしてもさっきの「猫（ねこ）です」ってどういうこと？

まさか、猫をあずかるの？

同じ屋根の下に猫がいると思うと、緊張（きんちやう）するわ。わたしも猫だし。

その上困ったことに、わたしは猫の言葉がうまく聴（き）き取れない。猫失格（ねこしつかく）よね。生まれた時からずっと店主と暮（く）らしているから、人間の言葉のほうがよくわかるの。

猫語は難解（なんげ）だ。微妙（びみょう）な音の違（ちが）いと目付（めづ）きで意味が変わる。「あつちいけ」と「こつちこい」なんて、そっくりなのよ。間違（まちが）えて猫パンチをくらったことが二度あって、それから猫とのつきあいは、なるべく避（さ）けてている。猫と話をしないから、ますます猫語にうとくなるわけ。

それでも商店街の猫たちとは、そこそこ交流しているわ。【ア】彼（かれ）らの話す言葉はとぎれとぎれに、そうね、半分くらいはわかる。【イ】カレー屋の黒猫（くろねこ）ポン太は、わたしを好きみたいで、すりよってくるけど、早口（はやくち）だから「ぎぎぎ……」とし

か聞こえない。「ウ」つややかな黒い毛、生命力が強そうない太い足、金色の瞳。【エ】男前なんだけど、歯ざしりみたいに言いよられても、ロマンチックのかけらもない。【オ】わたしは乙女だし、お年頃だし、恋愛にはあこがれる。けど、言葉の壁は大きいわ。

「一日百円です。何日おあずかりしますか？」

店主がしゃべった。②お客さまは返事をしない。代わりにごそこそという音、「あつ」という声、お金が畳にばらばらと落ちる音がした。

不器用なお客さまらしい。

一枚一枚拾う音、渡すような気配を感じる。おとしよりなのだろうか。お店を覗けばわかるんだけど、猫がいたら嫌だから、顔を出せない。

「七百円ですね。では一週間おあずかりします」と店主は言った。「一週間経って引き取りにみえない場合はうちのものとなります。それでかまいませんか？」

店主はひとりでしゃべる。返事はない。ぶっさらばうなお客さままだ。

走って出て行く気配がした。帰ったんだ。どこのだれだか、

「あつ」だけではわからない。走ったんだから、元気はいいみたい。老人ではないし、目も見えるんだ。

店主は目が見えない。部屋の中は自由に動き回れるけれど、外では杖をつくし、地面をたしかめるようにゆっくり歩く。

わたしは押し入れの中で息をひそめて待った。

もうじき店主はあずかりものをしまいに来る。そのときここを通るから、あずかった「猫」が見えるはずだ。

(中略)

あ、店主がやってきた。手にあずかりものを抱えている。

これが「猫」？

ぼてつとしていて、つるつるで、すいかより小さいけどメロンより大きくて、白い。わたしも白い。けど、わたしには毛が生えている。あずかりものには生えてない。猫ではない。

③とりあえず、ほっとした。

あずかりものはぶーんと、妙な匂いがする。なんだろう？ 嗅いだことがあるような、ないような。

店主は奥の部屋の前で立ち止まり、あずかりものに鼻を近づけ、匂いを嗅いだ。それから自分のてのひらの匂いも嗅ぎ、しばらく考え込んでいた。あずかりものを奥の部屋へ置くかどうか、

迷っているようだ。

「おるすですかあ」とお店で声がする。

店主は「今行きまーす」と返事をし、畳の上にそれを置いてお店へ戻った。

私は押し入れを出た。じゅうぶんな距離をとって、あずかりものをじっと見る。モノだけど、こっちを見ているような気がする。殺気は感じられない。近づいて匂いを嗅いでみる。うーん、やはりどこかで嗅いだことのある匂いだ。どこだっけ？

そっと前足で触れてみる。びくともしない。そっとの倍の力で触れてみる。

あっ、しまった！ べたべただ！

てごわい相手だ。べたべた攻撃をしてきた。あわてて肉球をなめると、あぶらのような味がする。

見た目はつるつるなのにさわるとべたべた。模様がある。④ 遠

くからだと丸く見えたけど、よく見ると形はいびつで、上に三角形がふたつあり、赤い色が塗ってある。その下に黒い丸がふたつ横に並んでる。その下によくわからない模様があって、さらに下に赤い線がぐるっと後ろまでつながって、まんなかに金色の丸がひとつある。

全体には壺みたいだけど、てつぺんに穴は無い。

なにこれ？

ふたつの黒い丸がこっちを睨んでいるようで、急におそろしくなった。逃げるようにお店へ行くと、店主は小上がりでお客さまと談笑している。濡れたふきんで手を拭きながらしゃべってる。さっきあいつにべたべた攻撃を受けたんだ。

なのかめ

(中略)

のれんがふわっと大きく揺れ、セーラー服を着た女の子が入って来た。

仏頂面で、挨拶もない。小上がりに上がることもせず、唇をかみしめている。女の子からはぷーんとスープの匂いがした。とんとんラーメンの子だ。

店主は「いらっしゃい」と笑顔で迎えた。立ち上がり、「今お待ちしますのでお待ち下さい」と言って奥へ行こうとした。

女の子は驚いたように「あの」と叫び、そのあと思い切ったように言った。

「なぜわかるんです？」

店主は振り返り、不思議そうな顔をした。

女の子は靴を脱ぎ捨て、小上がりに上がった。

「目は見えないけど、耳がいいって聞いたんです。耳で、すべてがわかる人だって。だからあのとき声を出さなかったのに、なぜわたしのことがわかるんですか」

女の子は怒っているようだ。あずけたとき、店主に声の情報を与えず、うまく自分の姿を隠したつもりだったのだろう。

「ほんと目は見えるんですか」と女の子は責めるように言った。

店主はまばたきをし、「目は見えません」と言った。

女の子はハッとして、下を向いた。かわいげのない子だけど、悪いことを言ってしまったと気付いたようだ。見どころはなくてもない。

(中略)

店主はやって来た。驚いたことに、まねき猫はもとの姿で女の子の前に置かれた。

「ひとつ謝らなければならぬことがあります」

店主は姿勢を正し、頭を下げた。

「不注意で割ってしまいました。ごめんなさい」

女の子は動揺せず、無表情だ。

「修理に出すとはよくないと思い」店主がそこまで話すと、女の子が「<sup>⑤</sup>警察にばれる」と口をはさんだ。

店主はうなずいた。

「ですから、わたしの手で修復しました。どうでしょう、継ぎ目が目立ちますか？ 新しいものを買いますか？ それならば弁償しますが」

「いい。最初に割ったの、わたしだから」

「え？」

「取ろうとしたら落つこととして、縦にぱかっと割れたんです。接着剤でくっつけたんだけど、ぴたつといかなくて。親にばれたら怒られると思って、ここにあずけたんです」

「そうなんですか」

「<sup>⑥</sup>少し嘘です」

「え？」

「落つことしたのはほんとだし、割れたのも、くっつけたのもほんとだけど」

「ええ」

「捨てようと思ってさわったんです。けど、落つこちで割れたら、あせってしまって、気が付いたら必死に直してた。割れたら

逆に、なんでかな、捨てにくくなって、ここに持って来た」

「なぜ捨てようと思ったんですか」

女の子はうつむいた。しずかな時間が流れた。やがて女の子は小さな声でぼそつと言った。

「匂うでしょ」

「洗ったからも匂いませんよ」

「わたし、匂うでしょ」

店主は、ハツとした。

「さっきわたしってわかったの、匂うからでしょ」

店主は困ったような顔をした。

「学校で、臭いって言われた」

女の子の声はどんどん小さくなる。猫の耳でやっと聴き取れるくらいだ。女の子はまねき猫をひとさし指でつついた。

「ひだりてさんっておかあさんは呼んでる。ひだりてさんのおかあで繁盛はんじょうしてるんだって。ひだりてさんがいなくなったら、お客さんが来なくなるでしょ。ラーメン屋なんかつぶれればいいって思った」

(中略)

店主は「ここにあげっぱなしにしてもいいんですよ」と言っ

た。

すると女の子は不安そうな顔をした。

「おかあさん、警察のひとに嘘をついた。ひだりてさんに現金なんて入ってない。通帳だって筆筒たんすの中です。いくら警察に捜さがして欲しいからって、あんな嘘」

女の子は恐ろしそうに店主を見つめた。

「警察に嘘をつくって罪になるんでしょう？」

店主はうなずき、女の子は小さくためいきをついた。

「なぜそんなにひだりてさんにこだわるのか聞いてみたんだ。そしたらおかあさん、昔のこと話してくれた。子どもの頃ころに父親とはなればなれになったんだって。もう何年も会ってなかった父親が、開店祝とっぜんいに突然来て、これをくれたんだって」

「そうだったんですか」

「これ、父親にもらった、たったひとつのプレゼントなんだって。わたしのおじいちゃん。会ったことないけど」

女の子は下を向いた。

「ここにあげたこと、おかあさんに言えましたか」

「まだ言っていない」

ここで会話はぷつぷつりと途絶とだえた。

なんとこの肝心かんじんなときに、わたしったらまた寝てしまったの！  
だからこのあとどんな会話があったかぜんぜんわからない。

しばらくして女の子が立ち上がる気配がして、目が覚めた。

女の子は靴を履はいて「じゃあ」と言った。手には何も持っていない。ひだりてさんは畳の上にある。やはりおかあさんに言えそう  
になくて、ここであずかることにしようだ。

店主は出て行く女の子に声をかけた。

「あなただとわかったのは、確かに匂いのおかげです」

女の子は振り返った。こわばった顔をしている。

「あなたからは、あたたかい匂いがしました。やさしい味の  
とんラーメン、みんな大好きです」

店主の言葉に、<sup>⑦</sup>女の子の顔はぱっと明るくなった。そのあと  
元気に走って行く音が聞こえた。

途中で寝ちゃったからよくわからないけど。

考えてみれば、まねき猫のひだりてさんがうちにきて七日間、  
あずかりやお客さまは増えなかった。わざわざ捨てなくても、  
たいした力はないんだと思う。

わたしは寝るのに忙いそしく、その後のひだりてさんの行方ゆくえを見

張っているわけにもいなくて、奥の部屋にしまわれたのか、燃  
えないゴミの日に捨てられたのか、わからないまま日は過ぎた。  
よくしたもので、ある日、情報はあっちから飛び込んできた。

「聞きましたよ！ 盗ぬすまれたまねき猫が戻って来たって！ 桐島きりしま  
さん、あなたが届けたんですって！」

相沢あいざわさんは興奮気味にしゃべる。例の点字ボランティアのおば  
さんだ。

(中略)

「今、ふっとひらめいたんですよ」

相沢さんはまるで推理をするように、顎あごをなでながら話す。

「あの小説が何を言いたいのか、少しだけわかったような気がし  
ます」

「ほう。それは何ですか？」

「誰しも事情がある、ってことじゃないですか？ 不思議な行動  
にもちゃんとわけがある。でもそれはそのひとにしかわからない  
し」

「わからないし？」

「他人が踏み込んではいけない」

相沢さんは窺うかがうように店主を見た。店主はとぼけたような顔

をしている。

「まねき猫はわけあって盗まれ、わけあって戻って来た」

相沢さんはそう結論付けた。たいしたひらめきとは思えないけど、本人は満足したようで、「おじゃまさま」と出て行った。

のれんは名残惜し<sup>お</sup>そうにまだ揺れている。

なるほどねえ。店主がひだりてさんをおうちに帰したんだ。

これで女の子の盗みは封印<sup>ふういん</sup>され、おくさんの嘘も警察に気付かれることなく事件は解決。

⑧ 店主のやさしい嘘で、ふたりの罪は消えてしまった。

わたしは店主に「うまくやったわね」と言った。もちろん「にゃあ」と鳴いただけだけど、店主はわたしを膝<sup>ひざ</sup>に載せ、「ないしょだよ」とささやいた。

(大山淳子<sup>おおやまじゅんこ</sup>「あずかりやさん」より。)

問一 —— 線部①「わたし?」とありますが、「わたし」は何者

ですか。十二字以内で説明しなさい。

問二 本文中には、「挨拶くらいいしないと、えらいめにあうから。」

という一文がぬけています。本文中の【ア】〔オ〕のどこに入れるのが最も適当ですか。記号で答えなさい。

問三 —— 線部②「お客さまは返事をしない」とありますが、そ

れはなぜだと考えられますか。その理由を説明した次の文の【 】に入ることを本文から二十二字で探し、それぞれ最初と最後の五字を書きぬきなさい。

【 】たいと思っていたから。



問四 — 線部③ 「とりあえず、ほっとした」とありますが、な

ぜ「わたし」は「ほっとした」のですか。最も適当なものを、次のア～エから選び、記号で答えなさい。

ア 「わたし」は猫と一緒に生活するのは嫌だと感じていたが、店主が持ってきた「猫」からは知っている匂いがしたため、むしろその匂いの正体を知りたいと思ったから。

イ 猫語を話せない「わたし」は生きている猫にどう話しかけてよいかわからなくて困っていたが、その「猫」と「わたし」には「白い」という共通点があることがわかったから。

ウ 同じ屋根の下に猫が存在するということは、うまく猫語を話せない「わたし」にとっては緊張することだったが、あ

ずかった「猫」は本物の猫ではなさそうだとわかったから。  
エ まったく声を出さないお客さまに対して「わたし」は不愉快に思っていたが、店主があたりものの「猫」を持ってきたことで、とりあえず取引が成立したとわかったから。

問五 — 線部④ 「遠くからだと……てっぺんに穴は無い。なに

これ？」について、次の問いに答えなさい。

(1) — 線部④の説明から明らかにになっている情報を図形として表せる部分だけ、解答欄のわく内に簡単に図示しなさい。なお、おおよその外形を補助線（点線）で示してありますが、利用しなくてもよいものとします。また、色の指定をする必要はありません。

(2) あずかりものの正体は何ですか。本文中から五字以内で書きぬきなさい。

問六 —— 線部⑤「警察にばれる」とありますが、この女の子

は何が「警察にばれる」ことを恐れていると考えられますか。  
最も適当なものを、次のア～オから選び、記号で答えなさい。

ア 自分がひだりてさんを盗んだ犯人だということ。

イ 自分がひだりてさんを捨てようとしていたこと。

ウ 母親が警察のひとに嘘をついたということ。

エ 母親がひだりてさんを父親からもらったこと。

オ 自分がひだりてさんを預けた張本人だということ。

問七 —— 線部⑥「少し嘘です」とありますが、どの部分が嘘で、

何が本当だったのかについて説明した次の文の「 」に入る  
ことばを、それぞれ十二字で本文中から書きぬきなさい。

「ア」たのは嘘で、実際は「イ」ということ。

問八 —— 線部⑦「女の子の顔はぱっと明るくなった」のはなぜ

ですか。最も適当なものを次のア～エから選び、記号で答え  
なさい。

ア 本当は嫌いではないのに、周りに臭いと言われてコンプ  
レックスになっていたラーメン屋の匂いを店主に肯定して  
もらえてうれしかったから。

イ おかあさんにも警察にも本当のことを言えずに困ってい  
たが、あずかりやさんがこのままあずかつてくれると言っ  
てくれて肩<sup>かた</sup>の荷が下りたから。

ウ 自分に染<sup>し</sup>みついたラーメン屋の匂いで店主に正体がばれ  
たのかと心配していたが、正体の話ではなくあたたかい匂  
いと言われてびっくりしたから。

エ 理由があって最初にあずかりやさんに来たときは言葉を  
話さなかったが、それでも店主に自分の存在を認識<sup>にんしき</sup>されて  
いたことがわかってほっとしたから。

問九 ― 線部⑧「店主のやさしい嘘」について、次の問いに答えなさい。

えなさい。

(1) 店主のついた嘘とはどのようなものでしたか。本文から推測して「〜というもの。」に続くように、二十五字以内で説明しなさい。

(2) このように、人を守るためにつけた「やさしい嘘」は時には許される、という内容を表す慣用表現は何ですか。解かい答欄とうらんに合わせて答えなさい。

三 次のことわざ・慣用表現の（ ）に入る、色を表す漢字一字を答えなさい。なお、同じ問題の空欄には同じ漢字が入ります。

- (1) ( ) に交われれば赤くなる
- (2) ( ) 羽の矢が立つ
- (3) ( ) は藍あゐより出でて藍より ( ) し
- (4) 万 ( ) 叢中紅一点そうちゅう

四 次の四字熟語の（ ）にあてはまる漢字の組み合わせを答えなさい。ただし、組み合わせは、互たがいに反対または対照の意味をもつ漢字同士とします。

- (1) ( ) ( ) ( ) 一体
- (2) 針 ( ) 棒 ( ) ( )
- (3) ( ) ( ) 名 ( ) ( ) 実
- (4) ( ) ( ) 意 ( ) ( ) 達
- (5) ( ) ( ) 三 ( ) ( ) 四
- (6) 三 ( ) ( ) 四 ( ) ( )
- (7) 九 ( ) ( ) 一 ( ) ( )
- (8) 空 ( ) ( ) 絶 ( ) ( )

五 次の――線部の漢字はひらがなに、カタカナは漢字に直して書きなさい。

- (1) 市民から多くの提言が寄せられる。
- (2) 望郷の念を抱く。いだ
- (3) 絵画展で作品を見る。
- (4) 会社の沿革を勉強する。
- (5) お年寄りを敬う気持ちをもつ。
- (6) 自由研究に虫のヒョウホンを作る。
- (7) 荷物が重くて腰にフタンがかかる。こし
- (8) 多くの銀行をケイレツにもつ。
- (9) トレーニングでハイキンをきたえる。
- (10) 乳幼児は料金からジョガイされる。

